

を解明するために *Gorgias* 466a4-468e2 の Soc. の発言——弁論家や独裁者は「よいと思われる (dokei autois)」ことは行っているが、「欲する (boulontai)」ことは行いえず、何の力ももっていない——に着目する。dokein という語が内包する doxa 性、および dokein と boulesthai の対比から彼女が引き出すのは、boulesthai と善に関する知の密接な関係であり、真の意味で want/willing する人は、善を知り、それに基づいて欲求の対象を実現する力を具えているとする Soc. の考え——No-One-Errs-Willingly thesis を支え、akrasia の否定へと導く立場——である。

ここに認められるのは、解釈の困難を認めた上で、各語の用法、また文脈を精査することにより、“the play of different interpretations”のなかで最も優れた解釈を“rigorous”に追求していく Segvic の基本姿勢である。探求の末に彼女が発見するのは、人間の欲求をも感化しうる Soc. の rational inquiry、また intellectual と moral の両領域にまたがる Ar. の practical rationality である。Segvic はこれらを、現代の倫理にも意味をもつものとして共感をもって捉える。

この共感の眼差しは、ch. 1, Protagoras' Political Art において Prt. にも注がれている。Segvic が明らかにする Prt. は、単なる実利思想家ではない。彼は、アテナイ人を鼓舞し、生活の技術とペリクレス的力を授けようとする教育者である。Soc. との違いは、現実政治の中でその力が及ぼしうるマイナス面を矯正するために必要な正しい選択を重視しなかった点にある。

当時のアテナイ人に対する Prt. の影響力は絶大であった。彼の虜になった若者達を救う Soc. の役割について、Pl. *Prt.* におけるホメロス『オデュッセイア』からの引用を手掛かりに論じるのが、ch. 2, Homer in Plato's *Protagoras* である。Segvic は、ホメロスの第 10 歌、第 11 歌(冥府行)と *Prt.* の対応に基づき、キルケ(Prt.)によって豚にされた(虜にされた)若者達を救出しようとするオデュッセウス(Soc.)を助けるヘルメスの役割をアルキピアデスが果たしているとする。また冥府行のモチーフは、実際には Soc.こそがヘルメスであり、ハデス(カリ阿斯邸)に下っていき、死者(Prt.に魅了されたヒポクラテス)の魂を本来到達すべき地へと導いていく役割を担っていることを示唆すると論じる。

Segvic が最も共感を抱く哲学者はたぶん Ar. であろう。Soc. と Pl. が Prt. との対決において自らの哲学を構築したのに対して、Ar. は、Pl. の善のアイデアやエウドクソスの「善=快樂」説に対抗し、人々が日常的に行う評価や行為を

重視する観点から、名誉、思慮、快樂のそれぞれに善としての価値を認めた。彼女はそこに Prt. の影響をも認める(ch. 4, Aristotle on the Varieties of Goodness)。しかし Ar. はまた、個人に現われる善をそのまま善とみなして済ます相対主義者ではなかった。endoxa をも含む人々への種々の現われは、人生の多様な可能性を示唆するものとして、むしろ dialectical inquiry の出発点とされるべきものである。人はそこから、生の全体を考慮に入れた熟慮(bouleusis)を行い、真の幸福を目指すことができるのである(ch. 5, Aristotle's Metaphysics of Action)。熟慮は、選択に帰着するある種の探求(zêtêsis)、考察(skepsis)である。それは推論を通して理性的・非理性的欲求の向かう方向を決定づける。この解釈は、熟慮とは telos に関わるものではなく、ta pros to telos に関わるとする Ar. の主張(*EN* 1112b11-12 etc.)と矛盾するように思われるかもしれない。しかし Segvic は、ta pros to telos がもつ意味の広がり(things with reference to the end)に着目し、この語を、目的を構成する諸要因をもカバーする表現として理解する。思慮ある人は、思いがけない事態に出くわしても、熟慮を働かせて必要とされる知を獲得し、幸福を構成する諸要因の認識を、より完全で優れたものにしていくことができる。Ar. にとって、倫理的正しさの規範となるのは、そうした学びの人——理性的探求によって自らの欲求をより優れたものに変え、gnômê, suggnômê をもってより善い社会生活を送ることのできる人——である(ch. 6, Deliberation and Choice in Aristotle)。

Segvic は本書に含まれる論文に基づき、Soc. の intellectualism に関する一書と、Ar. の実践知に関するモノグラフを著す計画をもっていた。それらが早すぎる死のゆえに実現されなかったのは本当に惜しまれる。しかし本書に遺された諸研究を通して彼女と dialectical inquiry を行うとき、我々は、Ar. 的な思慮ある人の理想を追求し、自身 suggnômê をもって古代哲学研究に生涯を捧げた Heda Segvic その人を身近に感じ、さらなる探求の道へと確かに誘われるであろう。

金山 弥平(名古屋大学)

C. Partenie, ed., *Plato's Myths*. Pp. xvi + 255, Cambridge UP 2009. \$99.00.

ミュートスからロゴスへ。神話的表象と合理的説明の対比は、ギリシア哲学の誕生を特徴づける重要な要素として、近現代の哲学史家たちによって伝統的

に取り上げられてきた。プラトン(以下P)のミュートスが、古来の非合理的思考の残滓として長らく軽視されてきたのも、この単純な図式がもつ影響力と決して無関係ではない。これに対し、本論文集の目的は、編者が序論で述べているように、Pのミュートスをロゴスによるディアレクティケーと相互補完的なものとして捉え直すことにある。このトピックは、Annas(“Plato’s myths of judgement”, *Phronesis* 27, 1982, 119-43)をはじめとして、近年では國方(『プラトンのミュートス』2007年)など多くの研究者によって注目されており、ミュートスと対話篇の文学的構造の関係性ととともに、現在のPのミュートス研究における主要な関心事のひとつである。そして、編者の序論は、Pによるミュートスの語の用例の分類や、ミュートスの哲学的意義に関する代表的解釈を、先行研究を踏まえながら簡潔にまとめており、Pのミュートス研究の便利な概説的性格も兼ね備えている。

本集に寄稿した諸論者は、それぞれ個々の対話篇を題材に、独自のアプローチからミュートスの哲学的役割を考察している。それゆえ、本評でも個別に論評することになるのだが、第1章のMichael Inwood論文(Pのミュートス全体から帰結する問題群の羅列)と第10章のElizabeth McGrath論文(ルネサンスの画家たちが描いたPのミュートスの紹介)は、上記の編者の目的に直接関係するものではないため、ここでは紹介を割愛したい。なお、本書に収められた諸論文は、Schofield論文(*Plato: Political philosophy*, 2006の第7章2節を若干修正したもの)とBurnyeat論文(*Rhizai. A Journal for Ancient Philosophy and Science*, II, 2, 2005, 143-65初出)を除く、すべてが書き下ろしである。

まず、David Sedley(“Myth, punishment and politics in the *Gorgias*”)の論文は、2004年に東京大学と京都大学でも行われた講演が基になっている。彼によれば、ゼウスの治世に行われたクロノスの治世の裁判方法の変革は、アテナイの現行の司法制度に対してソクラテスが意図した改革を象徴している。すなわち、魂を死後に裸の状態で裁くというミュートスは、ソクラテスの問答による対話相手の魂の改善に対応するのである。

続くGábor Betegh(“Tale, theology and teleology in the *Phaedo*”)は、『パイドン』61cのごく短いアイソポスの物語とその直前のソクラテス自身の言明との比較から、Pのミュートスの定型を見だし、他の対話篇のミュートスとも照らし合わせながら、それが目的論的な要素をもつことを指摘する。そして、ソクラテスはアナクサゴラスの書物を読んだ時に、そのような目的論的なミュートスによる宇宙全体の原因の説明を求めていたのであり、その期待は『ティ

マイオス』において初めて完成された、と結論する。斬新な発想と明快な論旨の好論文。

Malcolm Schofield(“*Fraternité, inégalité, la parole de Dieu: Plato’s authoritarian myth of political legitimation*”)は、『国家』414b-415cにおける「高貴な嘘」のミュートスを2つに分割し、前半のカドモスの話は守護者たちに兄弟愛を通じた愛国心を植えつけるために、そして後半の4つの金属の話は国家に必然的に存在する階層間の不平等を正当化するために、Pが唯一の説得の手段として導入した、と論じている。

次のG. R. F. Ferrari(“*Glaucón’s reward, philosophy’s debt: the myth of Er*”)は、エルのミュートスが、正義の報酬を期待するグラウコンの楽観的な考え方に向けられた消極的なものとする。つまり、ソクラテスがここで伝えようとした趣旨は、真の哲学者にとって、エルのミュートスで語られるような人生の選択が、〈善〉のアイデアを観照した後の洞窟内への下降と同様、肉体を持つ義務による哲学探究の阻害でしかありえない、ということである。

Christopher Rowe(“*The charioteer and his horses: an example of Platonic myth-making*”)の論文は、自身が1986年に出版した『パイドロス』のコメントリーの延長線上にある。彼によれば、ソクラテスの2つの話は、われわれ読者を徐々にエロースの深い理解に誘うような「視点の階層性」の提供を意図している。そして、ここでのミュートスは哲学的な対話の補足をなすものであり、魂の非理性的部分に訴えかけるものでは決してない、と以前のコメントを修正する。

Charles H. Kahn(“*The myth of the Statesman*”)は、『ポリティコス』がPの政治哲学に関する『国家』から『法律』への移行的対話篇だと論じる。このミュートスで描写される神的な牧者は、『国家』における哲人王とパラレルな存在であり、Pのここでの目的は、この理想的な政治家を、『法律』で本格的に展開することになる法に基づく次善の統治に向けて、ある種の観念的な場所へ定位することにあった、と主張する。

M. F. Burnyeat(“*Eikōs muthos*”)によれば、『ティマイオス』における *eikōs muthos* は、われわれの世界についての認識論的に不完全な理論的説明ではなく、デミウルゴスがこの世界を最善のものとして創造したしかるべき理由を述べる実践的説明である。ゆえに、この語は「ありそうな物語」ではなく、「ふさわしい物語」を意味している。ホメロスのテキストの証拠にまで遡って提出された非常に興味深い新たな解釈であるが、彼は、かの創造主が意図した事柄

はいかなる人間にも明確ではないので、結局、「ありそうな」という訳語も可能だと結論づけてしまい、いささか歯切れが悪い。

Richard Stalley(“Myth and eschatology in the *Laws*”)は、『法律』第10巻のミュートスに関して現在も影響力のある Saunders の解釈に対して反論する。Saunders は、『法律』のミュートスが、それ以前の死後の魂観を捨て、新たな「科学的終末論」を提示している、と述べる。他方、Stalley は、P の記述が変化しているのは、先の諸対話篇のミュートスが対話者を哲学に誘う目的をもって対し、『法律』のミュートスは通俗的な徳を受け入れ法に従うよう対話者に説得することを目的としていたからだ、と主張する。

以上、いずれも新鮮な視点を含んだ完成度の高い論考であり、今後 P のミュートスに関心のある人々にとって必携の書となるだろう。

岩田直也(京都大学)

小池澄夫『イデアへの途』Pp. 376, 京都大学学術出版会, 2007, 4600 円。

本書は、著者が1975年以来30年以上にわたって、プラトン哲学の真の姿を突き止めるべく、その夾雑物を同時に剔抉する作業を行ってきた集成である(「ミーメシス」に関する論考は、別にまとめられる予定とのことで、本論集には含まれない)。全体は、「風景」「測量」「迂回」の三部から構成され、第一部は叢書で「ソクラテス」「プラトン」を分担したもので、その裏づけとなる論文から構成された第二部への導入でもあり、第三部は「技術知」を中心とする *parerga* である。第二部の中核をなす「第五章の二節から第七章まで」は「本書に取り柄があるとすればここだけ」(363)と謙遜されるが、評者自身「初学び」の手引きとも手本ともした論考が並ぶ。紙幅の関係で、第二部「測量」を中心に、著者の辿った「途」を追走したい。

第三章「魂と消滅」は、*Phaed.*における「魂の不死」の「最終証明」について、これがそもそも「証明」であるか疑問を呈しつつ(40)、「不死・不滅」の前提となる「消滅」概念にその考察を集中する。「魂・生/死」の組み合わせにおいて、本来「生との必然的結合関係のゆえに、肉体に現在して生の原因となっている魂は、生の対極をなす死の襲来に対して、生とともに消滅する」(43)はずだが、「雪・冷/熱」「3・奇/偶」と違って、「生」は決して「滅びる」ことなく「退却する」選択肢しか残されない。ここに「退却する」という概念は、魂の不滅性の説明のために導入された(85)と著者の見る理由がある。

つまり、「魂不死の最終論証の意味」は、「生命としての魂」がまさに証明の埒外にあることという逆説が示唆される(86)。「魂の不滅性」が、特に取り出されて、「想起」と「イデア」の考察に先だてられるのはこのためである。

第四章「想起」では、(i)魂の不死(=「すべてはすでに学び終えられた」)、(ii)あらゆる事物の本質的同族性、(iii)魂自身の働きかけ、(iv)想起の切っ掛けとなる事柄、そして以上からの帰結(v)すべての発見に進展、という推論過程に破綻はないものの、その結論は受け入れがたいとする。そのうえで議論の中心は、(iii)の「魂自身の内発的な活動」にあるとするのは、前章での著者の考察からすれば当然であろう。また、所謂「探求のパラドクス」に関して、「探求の端緒」としての「無知の知」の確保に重点が置かれ、「知と無知との中間カテゴリー」として *δόξα* を導入することの無効性が鋭く指摘されるのも(104)、また、*Men.* 末尾の *αἰτίας λογιζόμενος* (著者の訳では「原因に遡行する思考」)による *ὀρθὴ δόξα* の縛りつけに、著者が比較的冷淡なもの、「魂の自発性」への著者の洞察による。だが、想起において実質的な役割を果たしているのは、こうした魂の自発性よりはむしろ、(ii)の *τῆς φύσεως ἀπάσης συγγενούης οὐσίας* (*Men.* 81C9-D1)であり、その訳を微妙に変化させながら何度も繰り返し言及されていることが(57, 60, 97, 119, 145, 150, 167)、自ずとその重視を窺わせる。後に第六章で、「想起説の内包する根本テーゼ(全事象の本性的連続性)(原範型/似像の世界構造)が、プラトンの後期対話篇においても堅持され、分割法の基本前提をなしている」(167-168)ことが明かされるが、Unitarian としての著者の立場は、先の句に予告されているときえ思える。

さて、第五章「イデア・原範型の消息」で論じられる本書の中心テーマは、文字通り本書全体に織り込まれているが、たとえば「われわれが(木や石などのうちに)知覚する“F”はFそのもの(Φ)のようであろうと欲し、それに憧れているが及ばず、劣ったあり方にとどまっている」(*Phaed.* 74D-E) (62, Cf. 173)という知覚者の知覚状況への一種の感情移入表現について、「ここで(主観)に対する(客観的な)物という分断は成立しない」(61-62)と指摘されるように、*Phaed.* で一層の展開を見る「想起説」は、目前の知覚状況を「(像)として見る」ことのうちに、「原範型」の「或る規範的な働き」(61)を確認するものである。その際、「似ているが缺けたところがある」という制約条件において(140-141)、「似ている」ことよりむしろこの「缺如感」によって「想起の視点が心的継起の過程から構造に移動する」(139)点が指摘されている(ここに、著者自身「(範型/似像)関係から類似の分離を断行すべきである」(364, Cf. 181)